

～ 「高・清フレンドリー古道」 ～

第 3 卷－VI部

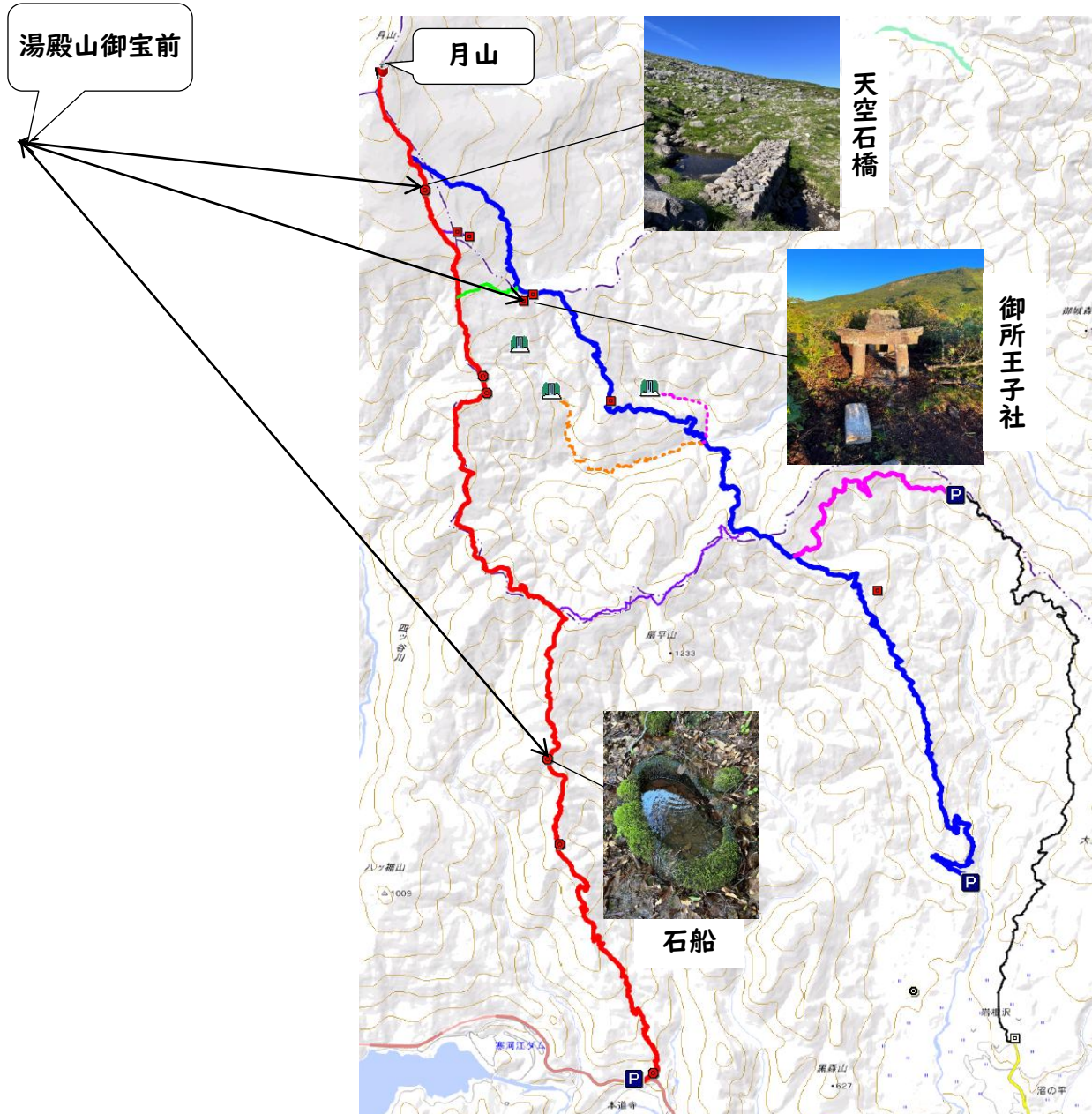
「意味ある設置方角と神観念」

この不思議なものは、いずれも、湯殿山御宝前と直結していることが判明した。それぞれで一心に遙拝したのだろう。また、これらの建立・設置に係った企画設計者は思想哲学、宗教に精通した人達であつたろう。

✓水受け「石船」の船首は、真北西の湯殿山を向いている。よって、船尾の方向に線を延ばすと寄進者出身地の山形八日町一带（湯殿山参詣者指定宿）に至る。

✓御所王子社の鳥居（稲荷大明神の座す石祠）に額づくると西北西の湯殿山を向く。

✓天空石橋（天空石堤）に立ち、両手を広げて橋軸に合わせた顔の真正面方角は湯殿山である。



この不思議なものは、意味ある方角を向いている。これらの建立・設置に係った企画設計者は思想哲学、宗教に精通した人達であつたろう。

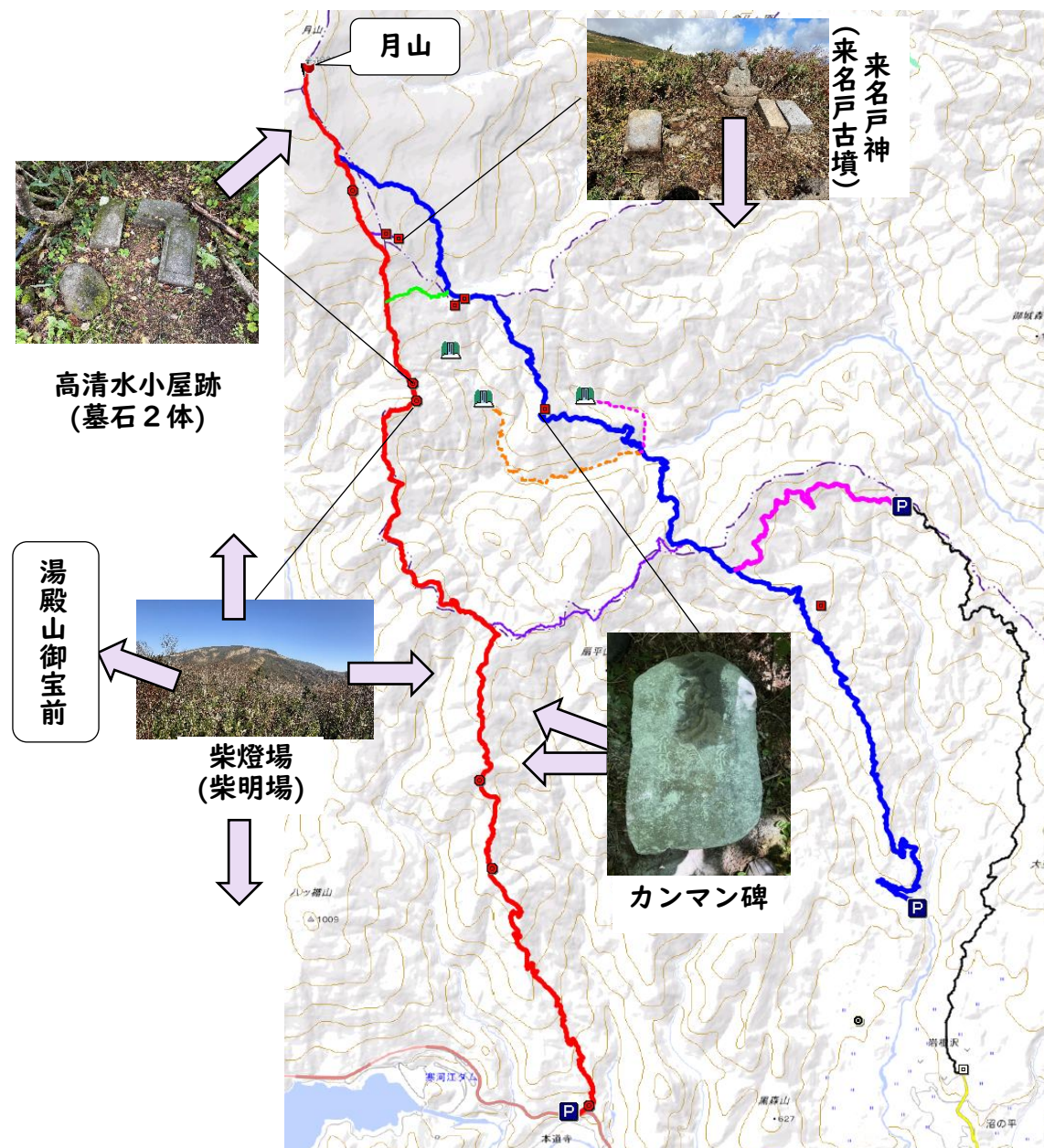
✓ 天空石橋(天空石堤)の軸方向はほぼ真正南北になっている。最高位の統治者・為政者は『北を背に南面す』に依拠するが、北辰(北極星、北斗七星、双方)信仰に由来する。

✓ 来名戸神(来名戸古墳)の地藏菩薩はほぼ真北を背にし、ほぼ真正南方を向いている。

✓ 高清水小屋跡の墓石2体は、陰陽道と言う「鬼門」の方角、ほぼ東北を向いて安置されていた。悪霊・怨霊封殺を狙ったのであろう。

✓ 柴燈場(柴明場)において、真東下方(東方)に鳥川不動滝があり、ほぼ真正北西方向に湯殿山御宝前がある。東方は浄瑠璃浄土薬師如来の世界、北西は陰陽道の天門・神門である。天皇の四方祭に通じる祭儀の舞台と見立てていたのではないか。

✓ カンマン碑は、西方を向くように設置しており、鳥川不動滝(不動尊)と湯殿山御宝前を強く意識したことが窺われる。



前記のことから以下の想起があった。

方角、あるいは、方向といえ、図-1 のとおりであり、幾何学的発想においては、四方八方への広がり、無限性に繋がれば円（円弧）に発展する。私は政治においては完全無党派、宗教においては完全無宗教である、私は特定の思想信条に偏って固執すること―― 一方通行的な考え方に拘泥することを最も忌避する人間である、（ただし、政治や宗教には大きな関心を持っている者である。） 私の心は“とことん^{シンクレティズム}とことんSyncretism”でありたいと肝に銘じている者として「色即是空、空即是色・・・色は見える物質性、空は見えない精神性」の心を以って「高・清フレンドリー古道」域をつぶさに観察して来た者であり、本域は「ごちゃ混ぜクロッシングエリア」、今様の金胎曼荼羅ブースなのだと思いうに至っている。

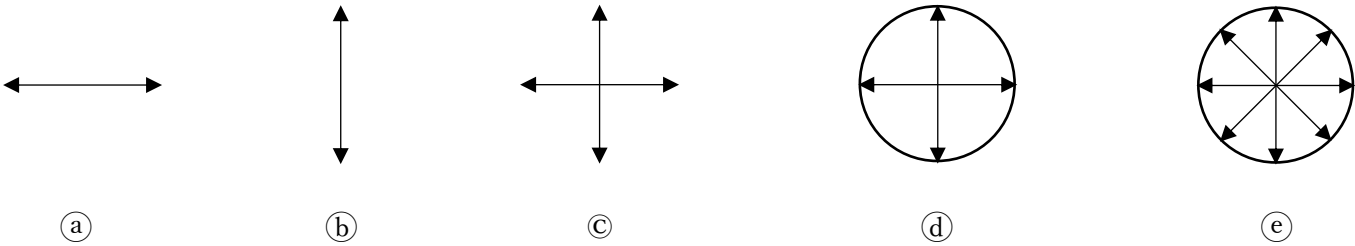


図- 1

その 1；まずは、信仰的には前記した以外では、昔から連綿と続く天皇の元旦祭儀「四方拝」（神祇拝）が浮かぶ。宮内庁HP に記載の主要祭儀一覧の元旦だけを取上げると図(表)- 2 のとおりである。

月 日	祭 儀	内 容
1 月 1 日	しほうはい 四方拝	早朝に天皇陛下が神嘉殿南庭で伊勢の神宮、山陵および四方の神々をご遙拝になる年中最初の行事
	さいたんさい 歳旦祭	早朝に三殿で行われる年始の祭典

図(表)- 2

ネットフリー百科事典「ウィキペディア」を参考に略記する。「・・・四方拝は、毎年 1 月 1 日（元日）の早朝、歳旦祭に先だって、宮中・神嘉殿の南庭で天皇が**天地四方の神祇を拝する儀式**である。殿上ではなく庭上で行われるのは天皇自らが地上に降り立ち身をへり下り天神地祇を拝するという意味があるとされ、このことを「庭上下御」という。儀式の大要は次の通りである。1 月 1 日（元日）の午前 5 時 30 分に、天皇が黄櫨染御袍と呼ばれる束帯を着用し、皇居の宮中三殿の西側にある神嘉殿の南側の庭に設けられた仮屋の中に入り、伊勢神宮の皇大神宮・豊受大神宮の両宮に向かって拝礼した後、続いて四方の諸神祇を拝する。この時に天皇が拝する神々・天皇陵は・・・」 ―江戸期までは神仏（天神地祇）とのさらに濃密な関係性を表現する祭儀を行ったようである。

その 2；もう一つ、内藤正敏著「修験道の精神生活」（青弓社）から次の内容を拝借する。「・・・つまり、秘所は人間が意味づけし、自然を思想化して、初めて成立する。だから宗教的に意味づけのない自然は、いくら美しく神々しく見えても、それは一枚の絵葉書のような単なる自然の風景でしかない。修験道では、“自然としての風景”と“観念としての風景”、言い換えれば、“見える世界”と“見えない世界”を二重合せにして視なければならないのだ。だから、出羽三山を歩くことも、単に地図にある空間を歩いただけでは歩いたことにならない。登拝や回峰行が近代登山と大きく違うところは、意味づけられた観念として

の山をも同時に歩かなければならないことだ。・・さらに修験道では、大自然の岩や瀧などに一つ一つ神や仏の名前をつけ、それに物語をつくっていく。こうして人間が自然を思想化してゆくことは、人間が大自然の体系の中に組み込まれることである。それは人間が自己を投影した大自然から、逆に人間が規定されることであり、大自然から人間を見つめられることになる。・・・」——私はこの内容に共感・同感することから取り上げた。

その3；本件エリアは空海と強い繋がり・縁で結ばれている。弘法大師こと空海は密教の宗祖であり、山形県内地元に係っては湯殿山、そして、旧本道寺（現一口之宮湯殿山神社）の開祖である。地元の皆が特に敬愛して止まない空海は、青年期二十四歳の思索「三教指帰^{さんごうしいき}」を出発点として、その後多数の著作を遺し、晩年五十七歳にして「秘蔵宝鑰^{ほうやく}」で帰着したと云われている。加藤純隆・加藤精一の著書を参考に後者のものから図(表)－3に抜粋して取上げる。

「秘蔵宝鑰」51頁・196頁より。

[原文・読み下し] 有・空、すなわち法界なりと観ずれば、すなわち中道正観^{しょうかん}を得。此の中道正観に由るが故に、早く涅槃を得。

[意訳] 一面においては現世のものは仮の^う有であり、同時に他の一面においては空であり、これがそのまま法界（宇宙）の相である、と観察・思索すれば、そこに縁起による中道の正しい見方が生ずるのだ。この中道の正観に由るから速やかに涅槃（安らかな境地）に到達出来るのだ。

（解説）片寄った見方を離れて中正の道に付くことが釈尊依頼の仏教の中心的な旗印の一つである。仏教各宗の根本に流れている主張で、これは、ほどの良さなどという中庸の道ではなく、捉われを離れて厳しく公平に現実を見極め、正しい行動を取ることを意味する。

図(表)－3

この三つを取上げた理由は次のとおりである。2022(R4)年7月以降、無償ボランティアで行って来た「高・清フレンドリー古道」域の地勢・史蹟等調査を踏まえると、先人は石造物等をそこに無造作に置いただけではなく、明確な意味を織り込んで、熱い信仰の心意気を投影したものであるということを、今この世に明らかにすることが出来たと思う。掘り起こした史蹟に触れると、前記天皇^{しほうはい}の四方拝に通底する思想性が浮かんでくる、そこでなければならなかった位置・場所、そういう方向でならなかった必然性を自然の中に、人間の知恵を融合したからこそ、後世、今世の私達にも新鮮に写るのである。「神仏」（神社・仏閣）は、拝めば拝むほどに、供養すれば供養するほどに、畏敬の念を傾けるほどにその神威仏光を増すと信じられて来た。「中道正観」は人間の真っ当な生きる道を示してくれる、同時に、前記図－1⑥のようにあらゆる「もの・こと」に対する全方位視点の重要性を訓えてくれる。古来先人は「天地人融合」とか、「天人合一（自然界と人は密接な関係）」とか、やかましく諭して来た。昔は方角を知る科学技術は発展していなかったから今の論評は現代人の後付けへ理屈だなどという見方もあるだろうが、“昔の人を馬鹿にしちゃいけない”だと思っている、往古の人はとっくに私達には想像だに出来ない智慧があったのである。

次頁は「高清水通り」について、浮かび上がってくる両面性、すなわち、横軸に見える物質性世界を、縦軸に見えない精神性世界を仮託・融合して概念図化したものである。

そういうことから、現代であっては、見える自然にだけ捉われるピークハント月山登山ではもったいない、見えない精神性の学びの素材が散りばめられているエリア、精神文化を育むエリアであることを訴求したいのである。

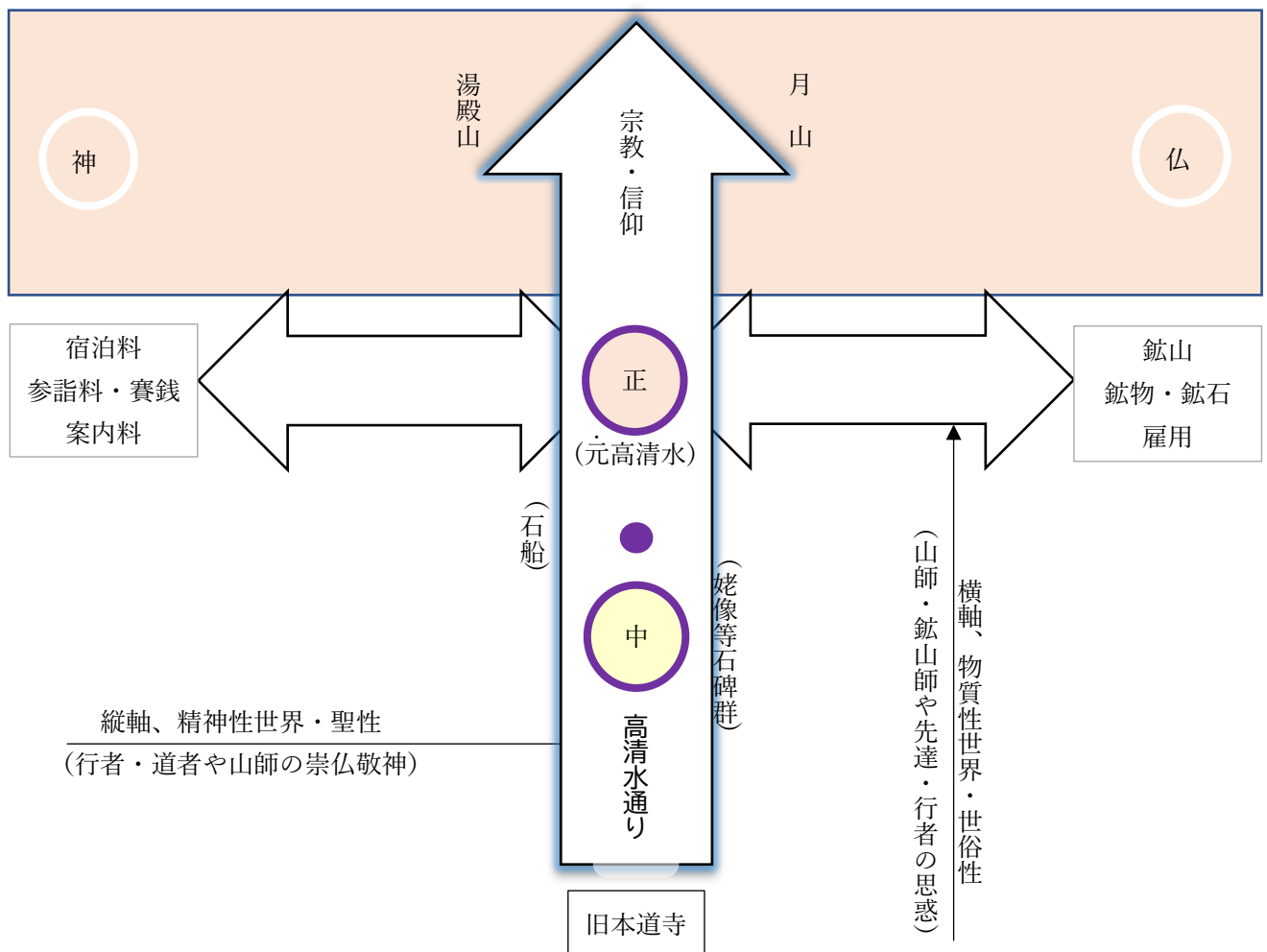
“天・地・人” 共生繁栄の道！

全体状況に鑑みて、本通りは往古より、単なる景色を眺めるためのピークハント往来道ではなく、

「人と人」、「人と自然」、「人と^{かみ・ほとけ}神 仏」の
共存共栄の道

宝冠と白衣を着用した上で往来した行者の思いに致せば、本通りは「五大に宿る魔訶不思議」の
因陀羅網^{とあみ}が投網された空間、と観念されて来たことであろう。

本通りは精神性と物質性の交差空間でもあった。		
	行者目線	山師目線
物質性世界 (見える)	宿泊料・案内料 参詣料・賽銭・初穂料 (対価・実利)	鉱山開発による金銭的利益獲得 雇用・労働市場提供 (経済・利潤)
精神性世界 (見えない)	加護・恩寵を期待した神仏への帰依・敬神崇仏 「中道 ^{しょうかん} 正 観」行を燃料とした精神活動／信仰帰依の世界	



※；「中・正」は当該場所でお大師の説く「中道^{しょうかん} 正 観」精神の修養・陶冶を特に意識したであろうとして当てたものである。

(end)